

「北海道で農業を」の夢を 実現し、子供2人も 後継者に



北海道平取町

香田 文雄さん(48)
理世さん(51)

2000万円の住宅ローンを抱え、
無理と言われた新規就農を、
農業をやりたいという思いで行動して実現。
子供2人も後継者として就農。

【プロフィール】

大阪府出身。高校卒業後、大阪の弁当店に勤務。就農相談会と北海道での現地視察を経て、2000年から北海道平取町で妻の理世さんと共に、町内の農家で1年間、さらに町内の研修施設で2年間の研修を実施後就農。2010年度には、北海道の新規就農優良農業経営者表彰の優秀賞を受賞した。

【経営概要】

農地面積1.1haでトマト・キュウリを施設栽培。施設は180坪ハウス9棟、100坪ハウス2棟。機械はトラクター、温風暖房機、防除機を所有。全量農協に出荷し、トマトは「ニシパの恋人」の地域ブランドで販売。年間販売額は2325万円で農業所得は約700万円。労働力は、本人と妻、子供2人とパート2人と研修生1人。

平取町は、日高山脈の西側に位置し、沙流川流域に肥沃な農地が広がる。降雪量が少なく温暖な気候から、日高の米どころとして発展してきたが、最近ではトマト、肉牛などの複合経営が盛ん。特にトマトは北海道1位の出荷量を誇り、平取トマトやその加工品をブランド化した名称「ニシパの恋人」として有名だ。

就農の動機 子供たちと触れ合う時間が 欲しかった

香田文雄さんは大阪生野区出身。高校生のときにアルバイトをしていた弁当店のオーナーに誘われて就職。18年目には、3店舗の経営を任されるまでになっていた。しかし、毎日朝早く出勤し、帰るのは深夜。子供たちと触れ合う時間がもてない日々、心が疲れていた。

仕事柄、素材である野菜そのものに興味を持っていた。また歌手の松山千春さんが大好きで、松山さんの出身地である北海道に憧れていた。家族旅行はいつも北海道。本屋で「北海道で農業を始める完全マニュアル」という本を見つけ、むさぼり読



平取町のトマトは、「ニシパの恋人」のブランドで高い評価を受けている

んだ。いつか北海道で農業をしたいと夢は膨らんでいた。

1998年9月、大阪で開かれた北海道新規就農相談会に参加した。そこで「話を聞いてみない？」と誘われてくれたのが平取町農業支援センターの斉藤博志センター長だった。

同町のトマトは「ニシパの恋人」というブランドを確立、価格が安定している。共同の育苗施設や選果場があるため、生産に専念することが可能だ。出荷は全量農協だが、糖度や品質で単価が異なり、頑張れば頑張った分収益が上がる。

同町の新規就農対策は国道の支援事業を組み合わせて行う。1年目は農家で、2～3年目は町の実践農場で研修を行い、3年目の秋に就農する。就農時の機械・施設等に対する2分の1助成(上限500万円)や家賃の2分の1補助(上限1万5000円)などがある。斉藤さんの「就農までしっかりサポートしますよ」という言葉に勇気づけられた。

香田さんは、平取町で就農をしたいと思ったが、道は険しかった。斉藤さんからは「生活資金として、最低500万円は用意して」と言われたが、家を新築したばかりでローンが2000万円あった。

それでは無理だと断られたが、「前例がなければ作れない」と行動。平取町に足を運んだり、斉藤さんや町長、農協組合長にも手紙を出し、どんな思いで農業を

やりたいのか、どういう農業をやるのかを訴え、研修生に選ばれた。

準備・研修 あえて「一番厳しい」農家で 研修

香田さんは、研修受け入れが決まるまでは家族には一切話しをしな



「大空と大地の中で」の夢を実現



就農後一時は断念したキュウリの栽培も再開した

導農業士である町内農家の仲山浩さん。現在の農協組合長だ。夫妻で1年間の研修を行った。研修先は、就農後のために町内で一番厳しい人にしてほしいと頼んだ。最初は、慣れない農作業の毎日に辛いと思うこともあったが、この時があったから今があるという。

01年からの2年間は町内の「紫雲古津実践農場」でトマトとキュウリ栽培を研修した。同実践農場では、担当するハウスを使ってみっちり研修ができる。色々な人が栽培のノウハウを教えてくれて、就農後の不安を取り除くことができたという。

また、研修期間中に、北海道立農業大学校で経営管理と機械の研修を受講し、就農に必要な基礎研修を終えた。

就農

町の助成金と道のリース事業で経営開始

「やっぱりね」の一言。子供たちも「北海道に行く！」と喜んでくれた。家は時間がかかったが売却でき、ローンは返済できた。

平取町には、2000年2月に移住し、町が保有する町営住宅に入居して研修を開始した。研修先は、指

研修を終え、02年末に念願の農地1.1haを支援センターや農協、近隣の農家などの協力で借り、その後取得。03年には早くも認定農業者となり、180坪ハウス7棟、100坪ハウ

ス2棟でトマトとキュウリの栽培を開始した。100坪ハウスは、町内の農家が無償で貸してくれたものだ。

機械は、トラクター、温風暖房機、防除機などを購入した。資金は町からの助成金500万円と北海道農業開発公社の助成・リース事業を利用したため、投資4500万円のうち、香田さんが負担したのは2300万円。香田さんは、リース料を払えるか、毎年不安だったという。

経営
作業の「見える化」で業績が向上

現在は、価格が安定しているトマトと、後作としてキュウリを栽培している。道の化学肥料や農薬の使用量を減らす「Yes! Clean」農業と、平取版JGAP(食の安全や環境保全に取り組み農作物生産工程管理基準)を取得し、安全・安心な生産に努

年間の作業スケジュール

月	加温・半促成トマト		夏・秋どりトマト	
	種まき(育苗センター)	ハウスへ定植	種まき(育苗センター)	ハウスへ定植
1月	種まき(育苗センター)			
2月	ポットへ移植	種まき(育苗センター)		
3月	ハウスへ定植	ポットへ移植	種まき(育苗センター)	
4月		ハウスへ定植	ポットへ移植	種まき(育苗センター)
5月	収穫開始		ハウスへ定植	ポットへ移植
6月		収穫開始		ハウスへ定植
7月			収穫開始	
8月				収穫開始
9月				
10月				
11月				
12月				



「農業にも「見える化」が大切」と香田さん

労働力は、香田さん夫妻と長男の剛さん(20)、長女の智美さん(19)にパート2人と研修生1人の計7人。当初、重要な作業は夫妻だけで行っていたため、作業が深夜まで及ぶなど大変だった。習熟した技術が必要な場合は、パートに任せられないためだった。

香田さんは、それを「見える化」した。もともと、パートの管理は前職でお手なもの。作業をマニュアル化し、農業経験がない人でも作業が出来るようにした。ハウスの側面(サイド)開け作業を、緑・黄・赤のテープを柱に貼り、「緑色のテープまで窓を開けておいて」と指示ができるようにしたり、

水やりを携帯型メトロノームを使って、リズムに応じて一定量与えるようにするなどだ。マニュアル化は経営実績の向上につながり、地域の部会平均を上回る高秀品率の生産を実現している。パートの責任感も向上した。仕事を任せられることでやる気が上がり、自分たちで工夫することで作業が改善されていった。

07年には、ハウスの近くに自宅を新築。新規就農者の親睦組織「新芽会」を立ち上げた。だが、08年に大病を患った。数週間高熱が続ぎ、入院。成人スチル病という膠原病の一種だった。2ヶ月間の入院後、3ヶ月間自宅静養した。目の前が真っ暗になったが、家族の支えと、地域の人たちや新規就農の仲間たちも駆けつけ、手伝ってくれた。香田さんは、感謝してもし足りないという。

家族

子供2人が就農し、家族経営協定を締結

香田家は夫妻、母、長男、長女に中学生の二男を含めた6人家族。香田さんは「新芽会」の発起人を努める他、各生産部会や振興会な



念願のマイホームの前で

どの役員、子供会の会長も努めている。自分を育てて、さらに病気の時にも助けてくれた地域に恩返しをするため奮闘中だ。

理世さんと子供たちは、地域のYOSAKOIソーランチーム「義経なるこ会」に所属。ミニバレーボールチームにも参加しており、すっかり地域になじんでいる。

最近、嬉しい出来事があった。子供たちが後を継ぎたいというのだ。大阪にいた頃は、家族に仕事の話はなかなかできなかったが、就農後、仕事の話の子供と出来るようになった。家族で一緒にいる時間が増えたからだ。剛さんは09年4月から滋賀県にあるタキイ研究農場付属園芸専門学校に入学。貴重な体験と実習により多くの仲間と交流を深め、1年で学ぶ

新規就農希望者への
アドバイス

農家は
個人経営の社長

べきものは学んだと10年3月に後継者として戻ってきた。智美さんも、同年3月に高校を卒業後、就農した。子供たちとは家族経営協定を結び、賃金を支払っている。

よく「強運の持ち主だね」と言われます。「棚からぼたもち」と言う言葉がありますが、それはどこの棚からぼたもちが落ちてくるのかを見て、そこへ素早く動き手にしたからです。

農業は、一人ではやっていけないので、まずは「あいさつ」が基本。次に、付き合いが大切です。新規就農者が頑張れるのは、温かく受け入れてくれた地域の皆さんのおかげ。そのことは忘れてはいけません。